

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 59 No. 2 2007

主幹 佐野 正之

巻頭言

英語教師とコミュニケーション力

福岡教育大学教授 ● 高梨 芳郎

英語教育でコミュニケーション能力の育成が教育目標のキーワードになってから久しい。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成が目標の一つとして『学習指導要領』に現れたのは1989年である。1998年に告示された現行『学習指導要領』では、中学校でも高等学校でも、「コミュニケーション能力」をさらに進めて、より現実に近い「実践的コミュニケーション能力」の養成が提唱されている。確かに、中学校や高等学校の英語授業でコミュニケーション活動が日常化し、最近では教室で、より実際の場面に近いタスク活動も数多くなされるようになってきた。

しかしながら、コミュニケーションが必要なのは英語授業に限られたことではない。生徒をとりまく最近の状況は一層複雑化、深刻化の様相を見せている。いじめ、不登校、学ぶ意欲・学力の低下は深刻な状況を示している。指導する教師の問題も深刻で、指導力不足や教える意欲の低下、規範意識の低下や社会性の不足などが指摘されることもある。このような状況の中で、教師も生徒も最も必要なものはコミュニケーション力である。生徒や保護者や同僚とのコミュニケーション不足が問題であると聞く。コミュニケーション力は英語教育だけでなく、教科を超えた教職の原点である。

英語教師の養成も、専門性と同時に教室現場での実践的指導力の養成を重視する動きが顕著である。教職大学院の設置も同様である。教職大学院の必要性は現代の教育課題の深刻化、複雑さが底辺にあるものの、同僚の教師たちとのコミュニケーションの希薄化も背景にあるという。教育は社会的な営みであり、教職は保護者や地域社会との関わり、同僚教師との学び合いを通して自らの指導力を高め、教師としての在り方を学び、自己の教育力の向上を図るものである。コミュニケーション能力の育成をめざしてきた私たち英語教師は、広い意味でのコミュニケーション力を高め、豊かなコミュニケーションによる教育の活性化をめざすことが今特に求められているように思う。英語授業でのコミュニケーション能力の育成もこのような土台を必要としている。

授業デザイン力を磨き、 指導の細分化を図る

富山県砺波市立出町中学校教頭 中嶋 洋一



1. 教師の授業力とは授業デザイン力

スピーキングの力をきちんとつけたいなら、教師の授業デザイン力(全体構想力)が欠かせない。デザインとは、ねらいをもった活動を仕組み、整合性のある評価計画を立てることである。

例えば、スピーキングの活動がスピーチ型か、対話型かで、ねらいが違ってくる。スピーチ型であれば、事前に下書き原稿を書かせ、起承転結の流れや発展のさせ方を丁寧に指導しなければならない。事後は、自己評価だけでなく、よいモデルとの比較から相互評価も位置づけたい。

一方、対話型であれば、話される文のキーワードを瞬時に捉え、関連した質問をする(書く)、意見を言う(書く)といった訓練を課さなければならない。

ねらいによって指導は異なってくるのである。いずれにしても、書く指導を丁寧に行わなければスピーキングの力はつかない。話したことをまとめて書く、書いたことを見ないで話すというように、書く活動にリンクさせるのがコツである。

2. 英語は情報をあとへ付け足す言語

教科書に出てくる基本文を、日本語から英語に直せるようにする。それが、スピーキングのミニマム・エッセンシャルである。と同時に、情報をあとに付け足す感覚を体得できるまで訓練することも大切である。その指導の一例を示す。

- (1)教科書の本文中のチャンク(意味のあるひとかたまり)を覚えて使えるようにする。プリント(左に英語のチャンク、右に日本語の意味が書かれたもの)を与え、真ん中で折り曲げて、日本語を即座に英語に直せるまで練習をする(個人、ペア)。
- (2)基本文をアレンジした日本文(方言)を与え、覚えたチャンクをつなぎ合わせて、英文に加工・編集できるような訓練を行う。

- (3)条件を与え、くり返す中で定着させる*クロード・インフォメーション・ギャップ・ゲーム等を十分に行い、その後自由度を高めた*オープン・インフォメーション・ギャップ・ゲーム等へとつなげる。

このような流れ、(3)のような「情報を交換し合う練習(思考を伴うドリル)」が、現場ではあまり重視されていないことが残念である。英語教師は、つい派手なタスク活動に目を奪われがちだが、下地づくりこそ大切にしたいものである。

3. ゴールが変われば指導が変わる

言葉は、いったん音声を伴って表出されると、話し手の意図や思いとは別に、聞き手の受け取り方という要素が加わり、新しい意味をもって来る。特に、声の調子、身ぶり等で伝わり方が違う。その「言葉のメカニズム」を正しく認識している教師のクラスでは、聞き手に混乱や誤解を与えない言い方を心掛ける。結果として、相手やコミュニケーションに関心が生まれてくる。

スピーチの評価項目を例にとって説明しよう。メカニズムが正しく理解されていない場合、評価項目は次のように表面的なものとなる。

- (1) 発音、アクセント
- (2) 表情や身ぶり
- (3) 声の大きさ

これだと、聞き手は、気づいたところから順に評価をしていく。途中で評価し始めると、内容に集中できなくなる。あとで質問をさせたとしても、部分的な質問に終始してしまう。

これまでの指導は、どちらかというところ、このように話し手中心で、いかによいスピーチをさせるかに重点が置かれていた。しかし、円滑なコミュニケーションを図るためには、話し手側に「アサーティブ・スピーキング(相手の気持ちや権利を

侵害することなく、自分の意見や考えをきちんと述べる)」という観点が必要になってくるだろうし、聞き手側も「*アクティブ・リスニング(話し手の意図をよりよく理解しようとする。発展させるために質問をしたり、コメントが言える)」能力を鍛えなければならない。

そこで、評価項目を次のように変える。

- (1) 全体の構成(筋が通っているか)
- (2) わかりやすさ
- (3) 英語らしさ(発音、ストレス等)
- (4) 表現の工夫
- (5) オリジナリティー

これらの項目を、最初の段階から示しておく。すると、生徒は、原稿作りから目的をもって取り組むようになる。教師は、先輩のスピーチ映像や原稿からよいモデルを選んで示し、項目のヒントにさせるだろう。さらに、印象に残ったスピーチを選び、なぜそう思うか、その理由を英語(または日本語)で書かせるだろう。また、印象に残った生徒のスピーチを2~3選んで、それに対して英語で「自分メッセージ」を書かせるかもしれない。書いたらお互いに交換させるだろう。

もうお気づきのように、ゴールを意識したスピーキング活動では、自分なりのこだわりが生まれる。学習者どうしをどこでどうかかわらせるかという視点さえあれば、果てしなく活動がつながる。つまり、指導が変わるのである。

4. 指導と活動の細分化を図る

一つひとつの活動が、ストーリーのようにつながっているだろうか。活動が終わった生徒に対して「次の一手」が用意されているだろうか。つまり、つまずいている生徒に対して、前の学習への「戻しの一手」が与えられているだろうか。指導と活動を丁寧に「細分化」すれば、授業の質が変わる。

例えばリスニングでは、わかっていないからと同じものを何度も聞かせるのは指導ではない。聞き取れないものは聞き取れないのである。そこで、つまずきを取り除くために細分化された指導(指導をbaby stepで行うこと)の一例を示す。特に

(3)と(5)の段階に注目していただきたい。

- (1)教師は、生徒に身近な内容の英文(1分程度)を聞かせて、質問をする。生徒はメモ(またはマッピング)で情報を整理する。答えをノートに書く。
- (2)友人と聞こえたことの情報交換をする。
- (3)教師は、一文ずつゆっくりと読む。長い文は「一気記憶」できる量(中・高校生は5語±2語)にとどめる。生徒は教師のあとから文やチャンクをくり返し、間髪を入れずに3秒程度で同時通訳をする。
- (4)最初からもう一度聞かせる。生徒はシャドウイングをしながら、全体を通して聞く。キーワードをつなげながら、頭から理解する。
- (5)最後は、教師が先ほどの内容に、さらに新しい情報(人、場所、時間等)を付け加えて、即聴・即解に挑戦させ、自信をつける。

アクティブ・リスニング、アサーティブ・スピーキングの訓練としては、次の(6)(7)のような段階が考えられるだろう。

- (6)自分がリスニングで聞いた内容について、さらに聞いてみたい質問や自分の意見をミニ・ノート(ノートを半分にしたもの)に3分間で40語程度を目標に書かせる。
- (7)終わったらペアで交換させ、相手の内容を読ませて、2分程度で自分の考えを書かせる。

戻されたノートは、教師が指示しなくても、むさぼるように読み始める。発信したら、「その後」が知りたくなるからだ。

本稿では、教師のデザイン力を磨くこと、指導の細分化を図ることの重要性を述べてきた。意欲のある、自立した学習者を育てるには、教師のダイナミックな考えと細かい配慮が欠かせない。道は平坦ではないが、それは学習者の未来の希望へとつながっている。

参考文献(*に関する情報は、以下で紹介)

Wilson, J. & WingJan, L.1993, *Thinking for Themselves*, Eleanor Curtain, Melbourne.

三浦 孝, 中嶋洋一, 池岡 慎『ヒューマンな英語授業がしたい!』研究社 2006年

スピーチで生徒を育てる！ －「15歳のメッセージ」から－

栃木県鹿沼市立東中学校教諭 笠井 剛清



1. はじめに

中学校英語の集大成として、「15歳のメッセージ」と称したスピーチ活動を、3年生に取り組みさせている。「友だち」「家族」「環境問題」「戦争」「私の宝物」「部活動」など内容は様々で、毎年いろいろなスピーチに出会い、たくさんの感動を生徒からもらっている。

スピーチを通して生徒が成長し、クラスの絆が深まる。スピーチで自分と向き合い、本気で考える。クラスの仲間は友だちのスピーチに、真剣に耳を傾ける。そして、相手を思いやる心や相手を大切にすることが育ち、クラスに連帯感が生まれてくる。スピーチで生徒が育つのである。

また、スピーチ活動の結果が、まさに私の指導の成果であり、来年度の課題でもある。そういった意味でも、私はこだわりをもって生徒にスピーチの指導している。

ここで、3年間で生徒をどのように鍛え育てていくか、生徒の心にどうやって火をつけ発信させるのかについて具体的に述べていきたいと思う。

2. グランドデザイン

私は「スピーチで自分の考えや感情を相手に伝えることができること」を中学校の最終目標(15歳のメッセージ)にしている。この目標を達成するために、「3年間というスパンの中で、生徒をどう育てるか、どう鍛えていくか」という視点から年間指導計画を立てている。「各学年の到達目標は何か」「各学年で取り組む言語活動をどのように関連させていくか」「毎日の授業ではどのような帯学習やトレーニングが必要か。また、それらをどのように系統的に指導するか」など、教師自身に「グランドデザインのビジョン(すべての活動が系統性をもっていること)」が必要である。つまり、ただ教科書をこなしている授業や長期目標のない授業では、自分が目指している目標を達成することはできない。「スピーチを来週やります」

と突然宣言しても、生徒は何をどうやっていいのかわからないし、それまでスピーチに必要な基礎学力を十分鍛えていなければ、苦痛を与えるばかりである。

私は年度当初に到達目標を生徒に明示し、それを達成するために必要な言語活動や帯学習、トレーニングについて十分説明をしている。そうすることによって、生徒は一つひとつの活動やトレーニングの意義を理解し、ビジョンをもって授業に参加できるようになる。このように授業の幹となるグランドデザインのビジョンが私の目指す「スピーチ」の基盤となっていることは確かである。

3. 帯学習

私は、授業の最初の10分間で「帯学習」を行っている。この帯学習とは、3年間で取り組む言語活動や文法事項に応じて、継続的、計画的に行われるものである。いくつかその帯学習の例を以下に紹介する。例えば、There is [are]～.の英文を学習するときは、in the park, on the desk, near the stationなど、「場所を表現する語句」をたくさん練習させている。それに関連する語句を20くらい集めて、右側に英語、左側に日本語を書いたプリントを用意し、制限時間(90秒)の中でいくつか言えるかをペアで競わせたり、数回行ったあとに確認テストを行ったりしている。このような語句の練習で語彙力を高めている。また、基本文の練習も行っている。表現したいことがあっても、それを英語に直す構文が頭に入っていないと、なかなか言いたいことを素早く英語で表現することはできない。他にも、教科書を使って速読、速写、暗写、そして、同時通訳の練習(日本語→英語、英語→日本語)や英会話Q&Aも行っている。このように、生徒を鍛えなければならないことに関しては、帯学習で継続的な取り組みをさせている。

4. トレーニング

自分の言いたいことを英語で書くことができ

ば、生徒は自信をもって話すことができる。そこで、スピーチを行う前に、日頃から基礎トレーニングを行っている。いくつか以下に紹介する。

①1分間スピーチ

1分間英語を話し続ける活動。「好きな食べ物」「スポーツ」「音楽」「猫と犬どっちが好きか」などの身近な話題から、題材を自由に自己選択させる。3分間でスピーチの準備をさせたあと、ペアで、原稿から目を離させながら、相手にスピーチをする。もし、スピーチが1分以内で終わってしまった場合は、聞いている生徒が、スピーチについていくつか質問することで、1分間英語を話し続ける。

②チェーンレター

自分の考えや友だちの考えをクラスで共有する活動。この活動を通して、生徒の表現力をアップさせることができる。教師が話題を指定し、生徒はそれについて3分間で自分の考えを紙に書く。書き終わったら、その紙を後ろの生徒に渡す。後ろの生徒はそれを読み、自分の考えを3分間で書く。書き終わったら、また、後ろの生徒に渡す。これを4回ほどくり返し、最後に持ち主に返す。返ってきたプリントを見ながら、自分の意見から、多様な意見に広がっていることを実感させ、自分のスピーチの参考にさせる。最後に、ペアでその話題について1分間スピーチを行う。

③ショートノート

2年生から、メモ帳のようなノート(B5判のノートを横1/3に切断し、生徒一人ひとりに配付)を、自己表現活動をするときに使用している。私は自己表現活動をさせるときに、「このノートを文字で埋め尽くすように」と指示している。回収後は、一人ひとりにコメントを書き、評価をして返却している。このノートはポートフォリオ的に作品がたまっていくので、今までの作品を振り返ることで、新しい表現活動に取り組む際の参考資料になっている。4月からの生徒の成長が一目でわかるので、教師にとっては学期末の評価の材料となり活用している。

④リレーノート

生徒が自主的に取り組んでいる活動で、3年生

から、このノート(B5判のノートを横半分切断し、4人のグループに1冊ずつ配付)を使い、課題英作文に取り組みさせている。教師が話題をいくつか示し、その中から自分たちで自由に選択させる。そして、1週間でグループ全員にノートを回し、教師に提出させている。苦手な生徒は友だちの作品を参考にしながら書くことができる。得意な生徒は自分の作品にこだわりをもって取り組んでいる。教師は、それにコメントを書き、評価をして返却している。

⑤生徒の心を揺さぶる工夫

生徒の「発信したい」という気持ちに火をつけるためには、本物に触れることが一番である。教科書の写真では生徒の心は動かない。例えば、SUNSHINE 2(平成18年度版)では、春日めぐみさんに直接手紙を書いて、自分たちの思いを伝えた。また、SUNSHINE 3では、セヴァン・カリス・ズキさんのスピーチをDVDで視聴して、モデルスピーチとして参考にさせた。私は日頃から授業で使える題材や資料をインターネットで検索したり、全国の先生方から授業で使える情報を集めたりしている。

5. 「15歳のメッセージ」を終えて

中学校最後のスピーチに取り組む生徒の表情は真剣そのものである。スピーチを終えた生徒の顔は、やり遂げた満足感で満ちあふれている。また、それを聞いている生徒は、一生懸命にスピーチのコメントを書いている。

私は必ずそれらをビデオに録画し、次の学年の生徒たちに見せている。これらの映像は、まさに1年後の到達目標であるからである。私はこれほどの教材はないと考えている。この映像を見た生徒は「先輩に負けたくない」と思うようである。

生徒と真剣に関わり、小さいことにコツコツと取り組むことで生徒を理解し、生徒の力を伸ばすための発問、指示を工夫しながら授業を行っている。そういった日々の取り組みこそが、生徒に満足のいくスピーチをさせる鍵であると確信している。生徒のすばらしい笑顔を見るために、今日も生徒を鍛え、生徒の心に火をつける授業をしたいと思う。

授業でのスピーチ指導

愛媛県新居浜市立泉川中学校教諭 竹林 由樹



1. はじめに

昨年度、本校に転任してきて2年生を担当した。新学期が始まって間もなく、生徒は英語の学習に対して積極的ではあったが、自己表現がたいへん苦手であるということに気づいた。日本語で「〇〇についてどう思うか」とたずねても、「わかりません」という答えが返ってきたり、黙ってうつむいたりすることは珍しくなかった。英語を学習する以前の問題を抱え、戸惑ったが、「もっと自分のことを英語で話せるようになりたい」「ALTの先生に新居浜のことを教えてあげたい」という生徒たちの言葉が私にやる気を起こさせてくれた。そして、この子たちが卒業する頃には、英語で自分の夢を語ったり、新居浜や日本のことについて説明したりできるようになってほしいと思うようになった。私自身スピーチ指導は苦手だが、初歩的な指導から失敗をくり返しながらかけてきた。

2. 授業での主な活動

教科書(SUNSHINE)のLet's CommunicateにあるSpeaking TaskからWriting Taskに発展したあと、必ずスピーチの活動(5文以上のスピーチ)を行うようにした。何度か簡単なスピーチをくり返したあと、自由なテーマでスピーチをするという最終の活動につなげた。スピーチができあがったら個別にアドバイスしながら添削し、毎回グループでの発表を行った。そして、グループの中で評価のポイントが高かった者が全体で発表することにした。ここでの工夫は、総合ポイントが高い者だけでなく、時には各評価項目での高得点者を代表にしたということだ。例えば、第1回目は『総合』高得点者、第2回目は『声の大きさ』高得点者、第3回目は『内容』高得点者という感じである。もちろん、スピーチの内容や生徒の実態に応じて、誰に発表させるかということをもっと吟味しておかなければならない。また、そういう工

夫をすることで、学年末にはほぼ全員が発表できることになる。

3. レディネスとしての訓練

物事について深く考えることや何かを感じさせる訓練から始めた。時には雪に覆われた山を見て“They are beautiful.”、柔らかいボールを触らせて“This is soft.”といった具合に、一人ずつ感じたことを声に出させた。また、できるだけクラスルームイングリッシュを使うようにし、生徒にもあらゆる場面で英語を使うよう促した。英語の使用場面を設定し、使わせることは難しくないが、それを継続することは大変だった。とにかく授業の中でできるだけ表現活動を取り入れ、その活動をくり返しながらかけてきた。例えば、インタビューは生徒も私も大好きな活動である。リスニングとスピーキングの領域に加え、インタビューしたことを書くことでライティングへとつなげた。書く作業は時間がかかるため家庭での課題とした。そしてその課題を次時に発表させるというように、活動が単発にならないよう心がけた。そうすると、発表しなければならないという緊張感から休み時間にも読む練習をする生徒の姿が見られると同時に、家庭学習も定着してきた。これが直接スピーチの活動につながったわけではないが、レディネスとして有効だった。

4. モデルとスピーチコンテスト

スピーチの活動を始める前に、モデルを示すことはたいへん重要である。教師がスピーチの正しいモデルを示したり、卒業生のスピーチの様子を見せたりした。毎年、新居浜市中学生英語スピーチコンテスト、高円宮杯全日本中学校英語弁論大会、そして鳳凰杯全国中学生英語スピーチコンテストにエントリーしており、下級生たちは上級生の真剣に取り組む姿を見て、憧れを抱いている。

特に校内スピーチ発表会は、下級生のモチベーションを高めるのにたいへん効果的である。

5. スピーチの作成

スピーチのテーマによって草稿にかかる時間に差があるが、基本的に草稿は家庭での課題にすることが多かった。「自分の夢」「自分の将来」というように、自分自身について語らなければならないテーマを与えたとき、それを苦手とする生徒たちの手が止まった。そこで、将来の夢や就きたい職業が決まっていない生徒には、仮定の話として作ってもよいとアドバイスした。そうすると、生徒のプレッシャーは減っていったようだ。初めから英語で書かせるのが望ましいのかもしれないが、まずは日本語で原稿を作らせた(これは日本語がわかるALTに添削してもらうときに、非常に役に立った)。日本語を英文にしていく作業をくり返すうちに、日本語と英語の違いを発見し、不必要と思われる日本語を除いたり、英語独特の表現を付け加えたりと、生徒の中に工夫が見られるようになった。また、慣れるまでは生徒の実態に応じて日本語を交ぜてもよいということにした。そうすることで、スピーチに苦手意識を持った生徒の負担はかなり減る。中学生がスピーチを作るときに困るのは、語彙力が乏しいということである。しかし、聴衆にも理解できるようなスピーチでなければおもしろくない。そこで、スピーチに使う単語は、友だちも知っているもの(教科書や副教材で既習の単語)や日本語で説明しなくてもよいものを使うよう指示した。つまり、何もかも辞書から抜き出さないということだ。

6. ALTとの連携

スピーチ指導にはALTに大いに関わってもらった。モデル、添削、スピーキングの指導、そして評価は必ずALTと連携して行った。原稿の添削では、ほめて生徒の原案を生かすようにしてほしいとALTに頼み、必ずコメントを書いてもらう。これが生徒にとってのステップアップにつながることは間違いない(常駐のALTがいないので、ALTの訪問に合わせて事前に添削をお願いしなければ

ならなかったが、90人近くの添削を喜んで引き受けてくれた。スピーチ指導を通して、日本の中学生の考えがよくわかるし、習熟度をチェックできると言って積極的に関わってくれた。また、生徒にとってALTからの評価は信頼性がある。

7. 評価

4つの観点(①内容 ②声の大きさ ③発音 ④話し方)を設け、各観点ごとに4段階の評価規準で評価した。教師が評価するだけでなく、生徒どうしの相互評価も取り入れた。評価表には自己評価の他に、友人へのメッセージとして、よかった点を書かせた。

8. スピーチ指導の効果

スピーチの活動は主となる領域はもちろんスピーキングになるが、他の3領域にも大いに関係があり、すべての領域で取り組むことができると思う。本校の生徒にとっての大きな課題はライティングである。ライティングの活動に至るまでに、時間をかけて作業の道筋をつけてやる必要がある。また、スピーチを正確に聞き取り、内容を理解するリスニングも慣れるまでかなりの時間を要した。そして、リーディングから暗唱に発展させてスピーキングの領域に一步踏み込ませた。スピーチ指導には大変な時間と労力を要するが、英語に対する生徒の関心・意欲を喚起し、それを持続させるのに効果的だと思われる。

9. おわりに

いよいよ高校受験を控えた3年生にアンケートをとった。「英語は嫌いだが、授業は楽しいし、スピーチの活動は好きになった」という生徒がいた。これは、スピーチ指導の成果と言えるかもしれない。しかし、現実には厳しい。「授業は楽しいけれど、点が取れないから好きになれない」という声。結果が勝負。今後の課題が盛りだくさんになった。

参考文献：岡 秀夫・赤池秀代・酒井志延『英語教員研修プログラム対応「英語授業力」強化マニュアル』大修館書店 2004年

心に残る言葉： スピーキングからスピーチへの一歩

福島大学助教授 佐久間 康之



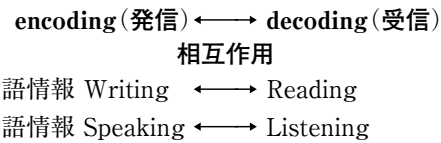
1. はじめに

「スピーキングの指導」は4技能のうち厄介で、後回しにしがちな指導、さらに「スピーチの指導」は、「英語スピーチコンテスト」へ出場する生徒への特別な指導と捉える先生も多いことと推察します。しかし、母国語では日常生活のコミュニケーションにおいて、「話す」行為は頻繁に行われています。英語の日常化が進む現代において、完璧な英語でなくても意志を伝えることの必要性が高まるのは言うまでもありません。

2. なぜ、スピーキングは大変か？

言葉を理解するとはどのようなことなのでしょう。この理解には、送り手と受け手の相互作用が伴います。文字言語情報の場合、発信する行為がライティングであり、受信する行為がリーディングです。それぞれに要する時間は、即座にまたは一定の期間内にと時間の調節に幅をもたせることが可能です。一方、音声言語情報の場合、発信する行為がスピーキングであり、受信する行為がリスニングで、いずれも瞬時の対応を余儀なくされるのが一般的です。また、リーディングやリスニングは既製の言語情報を受け取ったうえで処理し、理解する行為であるのに対し、ライティングやスピーキングは(白紙の状態から)言語情報を自発的に産出しなければならない行為、つまり「(瞬時に)産み出す苦しみ」を伴うものなのです。したがって、英語学習初期の段階にある中学生にとって、特にスピーキングは負荷の高い技能と言えます(下図参照)。

	受動的情報 理解	能動的情報 産出	所要時間	
			瞬時	長時間
Reading	○		○	○
Listening	○		○	
Writing		○	○	○
Speaking (Speech)		○	○	



3. 創造性を培うスピーキング指導

スピーキングを行う際に、相手との対峙のしかたによって、「一方通行」もしくは「対人間」に大別されます。前者の場合、テレビ、ラジオや校内放送等で情報を流すことが該当し、比較的自分のペースで話が行えるものです。一方、後者は日常生活でのコミュニケーションが該当し、相手の反応(言葉や表情等)をくみとりながら、話の内容、話す速度等を軌道修正していく必要があります。

ここでは、後者について、福島大学附属中学校の研究の一端、コミュニケーションの基礎を養ううえで「英語科で育みたい創造性」を紹介しつつ、中学生のスピーキング指導について触れていきます。「英語科で育みたい創造性」を、次のように捉えています：

既有的知識や経験をもとに、自分なりに英語で表現しようとする意欲や態度、また、その過程で発揮される思考力

以下のやりとりは、ALTに「福島県の名所」を生徒が紹介する授業の一コマです：

ALT: What is *To-no-hetsuri*?

生徒: Un... It's small Grand Canyon in Aizu.

ALT: Oh, I see.

上記の生徒の言葉は、ALTに理解してもらえるように、必死に考えた結果によるものです。生徒自身は「塔のへつり」を訪問した際のイメージに基づき、既存の(限られた)知識の中から、適切と思われる語を検索し、瞬時に言語を構築する葛藤状態にあります。生起する言葉はたどたどしいものであったとしても、頭の中では、多様な情報の取捨選択を強いられ、創造性が要求されていることとなります。単に「塔」や「へつり」の単語が既存の知識としてあったとしても、イメージが正確に伝わったかどうかは別問題なのです。

ここでの創造的なオンライン処理の特徴として、以下の2つがポイントとなります。

- ①検索手続きおよび速度：記憶貯蔵庫から既存の知識を瞬時かつ適切に検索可能か。
 - ②既存の(限られた)知識を駆使し再構築：記憶貯蔵庫にある語彙、文法、経験的知識等を利用し、不完全な形であっても産出可能か。
- これに伴い、指導者は以下の2点を評価として取り入れる必要があります。

- ①broken Englishへの寛容さ：話し言葉において、母国語でも完璧に話しているとは限らないので、多少のlocal errorや言い間違い等のmistakeは大目に見る。
- ②軌道修正を行う柔軟性：相手の理解度に合わせ、わかりやすい話(内容、言語レベル等)の仕方ができるかどうかである。これは、mother talk(母親が言語習得途中の子どもに話す場合)やforeigner talk(日本人が日本語の不完全な外国人に話す場合)に見られるもので相手への思いやりでもある。

以上のような、創造性を培う指導を日常的に行うことで、相手の心を読みとりながら臨機応変に自分の言葉で表現しようとする素地作りになるのではないのでしょうか。

4. 心に残るスピーチ(話し言葉)とは？

このフレーズから皆さんはどのようなスピーチを思い浮かべるのでしょうか。歴史上の名スピーチと評されるAbraham Lincoln, John F. KennedyやMartin Luther King, Jr. のスピーチを思い出される方も多いことでしょう。私たちがこれらのスピーチに魅了される理由はどのような点にあるのでしょうか。これらには、原稿の推敲を重ねた結果、研ぎ澄まされた表現内容、リズムカルな言葉の響き(押韻等)、キーフレーズのくり返し等が散りばめられています。さらに、原稿の卓越さだけでなく、話し手自身が、話すときに聴衆の空気を読み、トーンの強弱をつけ、絶妙な間のとりを行い、聴衆の心を揺さぶる技法—つまり、長いこと聴衆の記憶に残る仕掛けを作り出しているのです。

では、このように芸術的とも言える研ぎ澄まされた構成ならびに雄弁なる語り口でなければ、すばらしいスピーチとはなりえないのでしょうか。私たちが、すばらしいスピーチと感じる瞬間は、必ずしも卓越していなくても、聞き手のニーズ、様々な要因(年齢、性別、文化圏等)を考慮したものであれば、人の心に驚き、おもしろさや感動を与えます。その結果、人の心の奥深くで言葉が処理され記憶として残ることとなります。つまりは、話し相手をよりよく理解し、臨機応変に言葉で表現できることが重要となるのです。

筆者が10年以上前に、ある方からいただいた含蓄のある言葉(ごく最近、道灌山学園長、高橋系吾氏作と判明。ご本人からの掲載承諾済み。詳細はHP参照。<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~doukan/youchien/minasamahe.html>)を紹介しました。中学校の英語学習の内容は表現や語彙等において非常に限られています。しかし、broken Englishであっても、相手のおかれている状況(空気)を読みつつ、発せられる一言であれば、「人の心」に残るものではないのでしょうか。

5. 最後に

「その一言」

その一言で 励まされ その一言で 夢を持ち
その一言で 腹が立ち その一言で がっかりし
その一言で 泣かされる ほんのわずかな 一言が
不思議に 大きな力持つ ほんの一寸の 一言で

その一言で 励まされ その一言で 夢を持ち
その一言で 腹が立ち その一言で がっかりし
その一言で 泣かされる ほんのわずかな 一言が
不思議に 大きな力持つ ほんの一寸の 一言で

参考文献：『教育研究第67集 2006 創造性を育む授業～思考を広げ深める、教科学習のあり方～』福島大学附属中学校



「日常授業」所感

大分県大分市立坂ノ市中学校教諭 工藤 克文



言うまでもなく教師は多忙である。「授業」で勝負するのが教師の仕事であるが、「授業」だけが教師の仕事ではない。私の勤務校も例外ではなく、出勤してから部活を終えて帰るまで、宿題のチェックに始まり、雑用に追われ、めまぐるしく1日は過ぎていく。読者の方の中には、生徒指導に追われる毎日を過ごされ非常にご苦労されている先生方も少なからずいらっしゃると思う。なので、多忙であることの愚痴をこぼしつつも、私には「かわいい」生徒が存在することが救いである。

「かわいい」とあえて明記したが、最初から、かわいかったわけではない。基本的生活習慣の指導に始まり、学習規律、集中力を養う指導や保護者との連携など、「授業」内外とする指導は山積している。特に、入学したばかりの生徒はなおさらであるが、愛情をかけ、手間をかけ、時間をかけて、やっと「かわいらしく」なってくる。

さて、現在本校3年目の勤務であるが、全校学級数11学級に対し、英語科教員は2名配置である。大分市内では非常に稀であるが、「少人数」の授業は実施不可能で、担当クラスは、学年をまたぐ6クラスに上る。出張等での授業の振替があると、1日に担当する授業数は、学級活動等を入れるとほぼ6時間「張り付く」ことが、日常である。

前置きはこれくらいにしておいて、そこで何とかもっと授業を効果的にできる(と言えば聞こえはいいが、労力を減らしてかつ成果を挙げるといふ身勝手な)方法はないものか(?)ということが次に紹介する私なりの方法である。

まず、最近の少子化に伴う「空き教室」を「確保」することが、最大の命題である(ない場合にはLL教室を何とかできればよいのだが…)。これで、ずいぶん労力は軽減される。なぜなら、教材教具はすべて「備え付け」て置くことで、教師は必要最小限の「手荷物」でよいからだ。次に、あると

き気づいたのだが、いつも使っているパソコンで作ったワークシートを、生徒の前に拡大して提示すれば、説明の手間が大幅に省ける=労力が減る(手抜き(?)とも言うべきか)ということである。ついでに、生徒は下を向かないので、いちいちモニタリングに気を遣わず、たとえ中学1年生でもほとんど英語でオーラルイントロダクションが容易に可能である、つまり効果が上がる。というわけで、学校をお願いをして、プロジェクターをコンピュータにつないで授業ができるようにしていただいた(装備は、空き教室前方に厚めのカーテンと、黒板にはスクリーン代わりに白く塗った薄いベニヤ板、畳2畳分)。こうなると、コンピュータに教科書のスクリプトを入力しておけば、リーディングも、全員が教師と向かい合った状態で行えるので、3年生になっても「元気な」リーディングが可能である。言うまでもなく、教科書のリーディングも必要であるが、重たい(?)ピクチャーカードやフラッシュカードは、エクセルを使うことで十分対応できる。そして授業で指導したことはコンピュータに残っていくので、生徒へのフィードバックも非常に容易である。また、最近はずいぶん安価になったDVDプレーヤーやスピーカーをつなげば、映画を使ったディクテーションも可能で、意外なことに1年生にもかなり有効である。

もちろん授業の組み立ては、授業者自身がしなければならないが、このように効率的に多くのインプットを行うことで、ペアーワークからグループワークに至るまで、学習形態の工夫次第で、スキットメイキングや、英作文、スピーチなど、アウトプットを促すことが、容易になってくるのである(と私は感じている)。

すべては、私の「怠惰さ」からの発想ではあるが…。



未来へつながる発音指導

北海道北見市立光西中学校教諭 中野 恵理



1. はじめに

高校2年の夏に語学研修で初めて行った外国、アメリカ。現地で直に経験し、学んだことは数限りないが、何よりも衝撃的だったのは「発音」であった。まだALTなどいなかった時代である。自分なりに英語らしい発音を心がけた単語が全く通じない。例えばそれは“McDonald”であったり、“gangsters”であったりした。そして、綴って初めて理解した彼らが発した言葉は、私が発していたものとはまるで違っていた。たった一言の単語が、ちょっとした発音や強勢の違いで全く通じないという現実を知ったことは、私にとって大きな衝撃であったと同時に、反面、小さな希望ともなった。ちゃんとした発音をしさえすれば、よりスムーズに自分の思いが伝わる!という希望である。

2. 反復練習

英語の発音は、入門期である中学校3年間でほぼ決まってしまうと言っても過言ではない。だからこそ、子どもたちに「正しい発音」を習得させるためには「反復練習」が必要不可欠である。しかし、「くり返し」と「飽き」は背中合わせでもある。飽きさせずにくり返し練習させるために、あの手この手と苦勞するのが英語教師の常であるが、今年度の4月は、新しくなったばかりの教科書(SUNSHINE 1)付属の指導書『Teacher's Manual 授業案編』p.22~p.38のモデル授業案(東京都狛江市立狛江第一中学校 北原延見先生)をそっくりそのまま活用させていただいた。今年度の私の担当学年は1年生。教員生活14年、いまだかつてここまで指導書の指導案を有効活用したことはない。詳しくは『授業案編』をご覧くださいの一番であるが、まだ一度も目を通していないという方には、ぜひお勧めしたい。また、『英語教育』(2006年第4号)の「英語教師の裏ワザ~音読指導(第2回)」にもその概要が掲載されているので、興味のある方は併せてご覧くださいと、よりわかりやすいのではないかと思います。

1年生がアルファベットを学ぶ過程で、その文字と音の関係をしっかり教え、毎時間フラッシュカードを見せながら「アアアア、エイ」「ブブブ、ビー」というように26文字が表す音をくり返し練習させていく。その後、続けて付属の『スクール版CD』に収録されているLet's Start 2「アルファベット」(音楽に合わせて、CDのあとについてABCをくり返して言うもの)を用い、こちらでも「A→ア、エイ」「B→ブ、ビー」というように、リズムに合わせてながら、同じ形式で言わせるということを1か月間継続して行った。その後、学んだアルファベットの音と関連させた「単語」の読み方、ストレス、リズム、イントネーションを意識した「文」の読み方、そして「教科書の音読」へとつながっていくのであるが、この間、子どもたちは、以前の指導方法に比べて、声を出すこと自体を楽しみながら、自然に英語の発音、また、読み方の基礎を身につけていったように思う。印象的だったのは、1か月を過ぎ、次のステップへと移ってからも、この活動への子どもたちからのリクエストが多かったことである。初めて英語を学ぶ子どもたちにとっても、自信を持って楽しく参加できる活動であったということであろう。1年を終えようとしている今、この反復練習は、子どもたちが自分の力で、しかも正しい発音で単語を読むことの礎となる非常に有効な方法であったと実感している。

3. おわりに

週3時間という限られた時数の中で、英語の「自力」をつけさせるために「自学」は必要不可欠な要素である。今年度も終わりに近づいてきているが、自分の今までの指導を振り返り、子どもたちに英語を通して「自力」をつけさせるためにどうアプローチしていくべきなのか。「反省+実践=前進」と心得、今はまた、来たる4月の新しい出会いに向けて、精進していこうと気持ちを新たにしているところである。

中学校におけるライティングに関する目標として「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」とある。ライティング活動は、まず最初は「正しく写す」ことから始まるが、徐々に自分の考えなどを相手に伝えるなどの自己表現や、コミュニケーションへと発展する。それらの活動を楽しみ、自分や相手の存在を大切に生徒を育成したいと思う。本稿では日々の授業で取り組むことができるライティング活動を紹介する。

その1 板書文から自己表現にひろげる

教師は授業のポイントを板書する。生徒はそれをノートに書き留め、理解の定着に利用する。そのとき、板書された英文をノートに写すだけではなく、その文に続く文を自由に書き足すことを勧めるとよい。すると、生徒の取り組みが断然違ってくる。与えられた時間内に自分はどのくらい書けるかチャレンジし、ライティングを楽しむようになる。板書を正確に写すのに時間がかかる生徒も、徐々に+αの文が書けるようになってくる。以下、Can ~?(1年生)の授業例を記す。

・板書文

「～ができるかどうか」を聞くとき
Can you play soccer?
—Yes, I can. / No, I can't.

・実際に生徒Aがノートに書いた文章

Can you play soccer?
—Yes, I can. I can play it well. I'm on the soccer team. So I play it every day.
Can you play soccer too, Ms. Inaoka?

・実際に生徒Bがノートに書いた文章

Can you play soccer?
—No, I can't. It is difficult for me. I can't play soccer at all, but I can play table tennis.
I am in the table tennis club. It is fun.

このように各自で自由に既習文を書き加えることにより日頃の授業で自己表現を大いに楽しむこ

とができる。ライティング活動の前段階として、生徒に十分な口頭練習を与えることがポイントとなる。ノートは毎授業後教師に提出され、家庭学習と授業中のライティングの点検・指導がなされる。教師からのコメントや返事が支えとなり、生徒は次の活動にもファイトを燃やすようである。**その2 ペアワークによるスピーキング活動からライティング活動につなげる**

人は自分一人で考える以上に誰かと話をすることによって情報を得る場合が多い。以下、「Where do you want to go?」という話題(2年生)で、オーラルでのペアワーク後、最終的にライティング活動に発展させる例を紹介する。

(1) 1人目のパートナーAと

S1: I want to go to Switzerland.

A: You want to go to Switzerland. Why?

S1: Switzerland has beautiful mountains.

A: I see. You can see the Alps.

(2) 2人目のパートナーBと

生徒はまず、前のパートナーと話した内容をまとめて、次のパートナーと会話をスタートする。

S1: I want to go to Switzerland, because it has beautiful mountains. I want to see the Alps.

B: You can eat delicious food there too.

S1: Oh, yes! We can eat good chocolate and cheese fondu. They are my favorites.

(3) 会話後、Creative Writingとしてまとめる

I want to go to Switzerland, because it has beautiful mountains. I want to see the Alps. I can eat delicious food too. For example, chocolate and cheese fondu are my favorites. (以下略)

ここでは2種の活動を紹介したが、4技能(listening, speaking, reading, writing)の調和を図ったライティング活動を有効的に取り入れたいと考える。



帰国生との5年間

神奈川県立有馬高等学校教諭 甲斐 順

前任校の神奈川県立外語短期大学付属高等学校には、5年間籍を置かせていただきました。この間、帰国生の授業を持ち、また担任として無事卒業生を送り出すこともできました。この場をお借りして、帰国生との5年間について述べさせていただきます。

帰国生と言いましても、海外帰国生生徒募集枠で入学してくる生徒(海外在住2年以上、かつ3年以内に帰国)、編入試験を経て入学してくる生徒、帰国生徒募集枠には該当しないものの、例えば、生後間もなく渡米し、数年現地に滞在して帰国し、日本の小・中学校を経て、一般生として入学してくる生徒まで様々でした。その中には、現地校に通っていた生徒から、日本人学校に通っていた生徒までおり、多種多様です。英語力に関しては、英米の現地校に通っていた帰国生のほうが、日本人学校に通っていた生徒よりも優れていました。

帰国生の特徴として真っ先に挙げられるのが、耳がすごくよいということです。今も忘れられないのが、着任した2001年度、3年生選択授業「映画で学ぶ英語」の第1回目の授業です。ロビン・ウィリアムズが主演する『ジャック』のビデオテープを使って、ディクテーションをさせている最中のことでした。生徒の一人が「先生、ここはjustと言っているみたいですよ」と言ってきました。私の聞き取れていない箇所を帰国生の一人が指摘しました。2時間続きの授業で、その後もディクテーションさせる度に、「先生、ここは…」と次から次へと他の生徒からも指摘を受けます。第1回目の授業を受けたあと、変更ができる制度だったため、10人前後の生徒が他教科へ変更していききました。帰国生のすごさをまざまざと体感し、私の英語に対する自信は一気に喪失し、屈辱と恐怖を味わった瞬間でもありました。その次の週からは、英語字幕のない映画はまず自分でディクテーションし、ネイティブチェックを受けてから、毎時間

臨みました。

帰国生は、聞く力だけでなく、話す力もすごいものを持っています。高校1年生でも、英語で臆することなく堂々と意見を述べる生徒が何人もおりました。しかも英語は速く、こちらが聞き取れない「クチュクチュ」といった感じで発することも度々ありました。ティーム・ティーチングで、英語母語話者講師が帰国生の「クチュクチュ」を聴いて理解しているのを見て嫉妬し、英語母語話者講師も聞き取れずに再度発言を促しているのを見て、安堵したものです。

帰国生から、アクセントの位置を直されたこともあります('obstacle'は今でも見るたびに、直してくれた生徒たちの顔が浮かびます)し、「先生の英語は日本人っぽくなくて、聞きやすいですね」と褒められたこともあります。

また、帰国生のすごいところは、英米の文化を知っているということです。マザーグースの一節を口ずさめば、その後の一節をすぐに誦んじ、俗語は次から次へと出てきます。私が教わった言葉や文化もずいぶんあります。

その反面、帰国生にも弱点はありました。それは、日本の歴史や文化、言葉を知らないということでした。特に漢字では苦勞していました。日本語も英語もともに力のある帰国生も中にはいましたが、本人と家族の努力が相当大きかったようです。それでもその子たちの妹がセミリンガル状態だと聞くと、昨今の早期英語教育の過熱ぶりは、本当によいことなのかどうか疑問に感じます。

たった5年でも、帰国生との思い出は数多くあります。特に、学級担任として受け持った帰国生たちと過ごした日々は私の財産になっています。その生徒たちに感謝するとともに、いつの日か日本、あるいは国際舞台で中核となって活躍してくれることを願っています。

高大連携の英語教育とは？

— 受験英語が果たす役割 —

京都府京都文教中・高等学校教諭 平井 正朗

1. はじめに

教育界の“バブル期”でもあったゴールデン・セブンには、日本列島はまさに“お受験”一色と化し、いわゆる“教育産業”も隆盛を極め、〈受験戦争〉という言葉まで生まれた。英語教育においても、いつまでたっても英語が話せない要因が、「文法訳読方式」を中心とした指導法のせいだと批判され、今や「英語が使える日本人」育成のための指導法開発が緊急課題となり、その帰結かどうかはわからないが、2006年からセンター試験にリスニングが導入された。

2. 受験英語は本当に破綻したのか？

〈受験英語〉という“業界用語”がある。偏差値という競争原理の“ひずみ”から生まれたこの言葉は、外国でも知られるほど定着したものになっており、世間一般では暗記中心の「おもしろくない勉強」というマイナス・イメージが根強い。しかし、その利点はあまり語られていないような気がする。

“ゆとり教育”世代の生徒は「ムズイ」と悲鳴をあげるかもしれないが、〈受験英語〉には原書講読への方向づけや専門分野への背景知識育成といった“アカデミック”な一面もある。出版事情が変わってしまったため、最近では、知的欲求を満たすような本が少なくなったが、以前は大学での専門的研究へ誘うような個性的な学習参考書が、次々と世に送り出されていたのではなからうか。例えば、受験生の「バイブル」と言われた『英文解釈教室』（伊藤和夫，研究社）には、日本人が英語を読むとき、どのように頭を働かすかが追求され、リーディング・スキル開発へのヒントが隠されており、進展著しい心理言語学との隣接が見られる。

『英文読解講座』（高橋善昭，研究社）は、生成文法の知見を高校生レベルにまで対応させて、入試の素材となる評論文レベルの英文を「形」から読むには何が必要かが述べられている。『英文法講義の実況中継』（山口俊治，語学春秋社）では、ネクサスをはじめとする伝統文法の考え方が紹介されるだけでなく、英文法の根底理解に向けての本格的なアプローチが試みられ、教科教育法としての参考文献になりうるものになっている。その他、賛否は別にして『英語長文読解講義の実況中継』（本 正弘，語学春秋社）におけるスラッシュ・リーディングは、速読指導に一石を投じたこともまた事実である。

3. 高大連携への模索

— レキシカルグラマーの活用 —

ここでは、大学入試レベルの読解対策として実践しているレキシカルグラマーを応用したアプローチを紹介する（レキシカルグラマーとは、語彙項目に文法情報が含まれているという前提で、語彙のコアから文法を解明しようとするものである）。

(例) Also, there is now evidence that damage to the hippocampus may play an important role in memory loss. Studies conducted on patients who have suffered damage to this area of the brain show that while they can still recall memories stored before the brain was damaged, they are unable to remember new facts.

(福岡教育大，'06)

(また、さらに海馬の損傷が記憶力の衰えに重要な役割を果たしているかもしれないという証拠

がある。脳のこの領域に損傷を受けた患者に対して行われた研究によれば、そうした患者が脳の損傷を受ける前に蓄積された記憶は依然として思い出せるが、新しい事柄を覚えておくことができないということである)[傍線，イタリックは筆者]

(例)の下線部のように複雑な英文の内容把握の場合、chunkingすることによってsense groupを捉え、その修飾関係を明確にしながらSVをつかむのが一般的である。その際、心理言語学でよく引用される“ガーデンパス文”The horse raced past the barn fell.(納屋を抜けて走らされた馬が転んだ)を例に出し、このようにVと過去分詞を間違えやすい〈S [名詞] + (p.p.~) + V + X〉の構造では、ネイティブ・スピーカーでさえ最初、The horse racedをSVと知覚するものの、fellが視覚に入った途端に、fellがVとして機能していることを認知し、最初の予測を修正し、racedを過去分詞と判断するというリーディング・プロセスをやさしい言葉で“レクチャー”すると、生徒は目を輝かせて聞いてくれる。また、紙の辞書とは違い、人間の頭の中に記憶されたと仮定される“心的辞書”(メンタル・レキシコン)を紹介し、その中の「語彙情報」を活用して構造と意味を結びつけながら授業を展開すれば、さらに興味・関心を抱いてくれるだけでなく、直読直解にも相乗効果が期待できる。以下はその指導事例としての授業での一コマである。

—(ガーデンパス文について説明し、英文を音読したあとで)今までコツコツ頭の中に“蓄えてきた”すべての知識をフル活用して読んでいこう。ネイティブだってわかりにくいんだからすぐにできなくても気にすることはないよ。まず、文の頭にあるStudiesは名詞だね。動詞ならStudiesの前に3人称単数の主語となる名詞があるはずだしね。Studiesの意味は「研究」だよ。複数形だから「いろいろな研究」と訳してもいい

ね。次に「研究」はモノゴトだから“conductする”ではなく、“conductされる”もんだ。そうするとconductedは動詞ではなく、過去分詞として前の名詞Studiesにかかっていると考えるのもいいんじゃないかな。さらにpatientsを補足説明する語句として関係代名詞 who ~と続いているから“意味のかたまり”を大きく捉えようとStudiesからbrainまでということになるね。そうすると「脳のこの領域に損傷を受けた患者に対して行われた研究」という意味になるのがわかるかな。showは、〈A show B〉で「AはBを示す」だから、Studies show~は「研究は~を示す」ということで文全体の中でSVとなっているね。「研究によれば~」とすると、より日本語らしくなるよ。show~は「~を示す」だから、that以下は目的語だね。thatの内部がややこしそうだけど、〈while SV~〉はひとかたまりとしてカッコでくくれば文構造がわかりやすくなるんじゃないかな…。

小学校から大学までの一貫教育が標榜される昨今である。大学の教員が特別講座として高校で授業をしたり、高校生が大学や短大で講義を聴講したりといった“交流”が活発化している。今流行の高大連携の英語教育を考える場合、現場サイドのコンセンサスとして、様々な分野での知見を高校生向けにアレンジすることによって、英語学習に対する興味・関心を高める配慮も必要ではなからうか。

参考文献：佐藤芳明「レキシカルグラマーのすすめ」、『英語教育』（2006年9月号，pp.18~21）大修館書店
横川博一「文理解のプロセスからみたメンタル・レキシコンの構造」、『現代英語教育の言語文化学的諸相』（pp.248~261）三省堂 2001年

外国語教育は人格形成か？

外国語を教える目的とは何か？ 外国語学習者の持つ動機については、様々な研究者が様々な角度から取り上げてきた（Gardner & Lambert, 1972; Deci & Ryan, 1985; Dörnyei, 1994）。しかし、教師がどのような学習者を育てたいと思っているかに関しては明確な議論がなされていない。われわれは何を目標に日頃生徒に接しているのか？

昨年、あるソーシャルネットワークサービスの中の「英語教育」というフォーラムで、「言語観」を巡って論争があった。もともとの議論は、日本の中等教育において英語が標準の外国語として教えられていることが少数言語話者を軽視しているのではないかということであったが、最初の投稿者は、外国語教育の目的は実用に供する技術訓練ではなく、言語・言語話者・言語文化に対する「気づき」あるいは「思いやり」であるとして人格形成に議論をすり替えてしまったため、公平さの議論は失速してしまった。実はこの人格形成論こそ投稿者の真の狙いであったが、自分の主張をくり返したただけだったので、不毛な結果に終わってしまった。このことを通して、多くの真面目なフォーラム参加者は何のために英語を教えているのかについて考える機会を得たことであろう。

このような論調が横行する背景としてまず考えられる理由は、実業界を中心とした「実用英語」の圧力に対する反発である。つまり、表面的に資格試験や能力テストのスコアが上がってもそれは英語が本当に身についたことにはなりませんよ、それだけなら町中にあふれるテスト塾でもできます、私たちは英語を通して海外の社会・民族・文化を理解し国際的視野で行動できる日本人を作りますよと。このお題目だけなら誰もが納得できる。しかし実践の段階で人格形成教育に重点が移行すると、コミュニケーションをするためのインフラとしての言語技術がなおざりにされてしまうのである。

それではなぜこのような目標のずれが生じてしまうのか？ 一つのもっともな考え方は機能主義

的言語教育に対する疑問である。三浦・弘山・中嶋編著『だから英語は教育なんだ：心を育てる英語授業のアプローチ』（研究社、2002）は、生徒および教師の人間性を磨き成長を促すことが価値のある教育であるとしている。これはコンテンツ中心の学習であり、確かに学習者個人の経験や関心に結びついた意味のある言語活動が有効であることは議論の余地がない。また、協調学習活動も学びやすい環境を作るという点では受け入れられている。しかし、例えば性差別の話題を読んで社会的自覚が高まった、あるいは短歌を英語で作って感受性が高まったということと英語を身につけたということは別の次元の話である。

人格形成論の信奉者は、しばしば語学に主体をおいた教育実践すら重要でないと考える傾向がある。すなわち、言語という媒体の学習を飛躍していきなり心の成長で到達度を評価するのである。これは、見方によっては指導技術の不足や英語を使うことに対する自信のなさから無意識に逃避しているとも言える。「英語は心だよ」という甘いさやきは、現場教師にとっては目先の悩みを忘れさせてくれる麻薬である。一方生徒たちは教師にエンターテインメントを求め（荒井、2006）、地道に勉強しない風潮は地道に教えない（で済む）人格形成論と手を携えかねないのである。他の教科ではそのようなことは起きない。「国語」を含む言語教育が道徳教育に流れやすいのは、そこに「お話」があり、教師が人生を語れるからである。しかし、「心」だけでコミュニケーションはできない。大切なのは言葉の習得に意味を与えることであって、付随的次元と混同してはならない。

（玉川大学教授 安間 一雄）

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、5月、9月（第55回中村英語教育賞入選論文発表）、2008年1月、3月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内（本文分量）
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈呈いたします。